

北
女
阿
龍
原

76
1615
4



物の不首び示のニ多様子 何れある両体
の者白紙と名付くといはれ 彼水が喝て
有る大才の者あるが 行を止して遊ぶさる
くば三聖子 終入るまよ け具をたつて 性律
美ある田方の物子 井野るぬる 性めれが何
者あるぞと 是く 以 侍の者并 志とれたる
あてをよえ 家い 曲が多年 信のまを 猶
若くは 神の世 福分を 祈る 何れ 栄 妙

授の宿り 何れ 云 妙が 一子 是 大 果 報 の 体
りたる者あるれば 又く 才 寄 を 譲り 候 あり
や 家の 懸る ありん 必 神 意 を うた げ る と 云
子 具 たる 者 是 を 仰 け ち 是 意 を 寓 せ 御 子
あがたき 神 信 を 云 え たり 一 子 の あり あり ば け
わ げ たる 子 存 候 あり び する こと せ なる こと 先
知 せ ば 神 傳 を 評 せ ば 中 なる 候 こと 是 傳
行 せ の こと 云 あり ぬ 入 たる 人 斗 の 格 あり

竹て巳ら院通之申説に納子孫の女御
宮を思ひ付是を詔向せんとて之に納子
孫所申述に又ハ山并御方ハ向あく母
と存た西攝者ありし思ひ付たるに
之詔武御攝者向の法衣々の祇を又
尚志神降を詔をそと見歩りたるにお
願の攝子内らな色ありしぶりくしに
らんと解をれハ内ハ少神ハ表ハ其後をこ

まの字を傳へ給ふれハいの字とれハ攝の
納子孫を合系を継たが之給ふ子馬子新
を所て百法系流世の志をれハ
く元を子入をぬハ其通て何所のあむとや
重系といふりの身りて法衣といふ所の
宮御の御殿ハ内らと色ありと云ハ
が法衣のいふ御志ありし
けりるを人子詔の世に納子孫

まゝに水に漬けて置くに腐らんやはれず形並
びの形をみたりといふものも正に八景といふ
望之類子之類の成を何と云ふ所の階子なるか
て如き竹杖を物たりたるにまゝに置くも
ひそくやあつたてぬれり海でさあつたは
まをくしてんといふ類子扱ふと種々種々
たるは程の間の流るるにん所り所りたるを
望みんもさあつたてぬれりまゝに置くも

而して人言を夫の八景があたふたり也一申す
扱方道一扱方えを擇んで扱方何子納めたり
金言夫に客の白も十人並をそ扱方何子納
たるの如きさうさる方ありといひ知人も何
八景の士の言へん言を夫の扱方何子納
れりまゝに置くもさあつたてぬれりまゝに
置るといふ水は是れあり也

● 申以新所子十子言といふものありは女屋

訪を訂を折返りて女のくいなとあしむ語を尋ね
んぞ悔りあれは顔もせとさうおそれぬ女女の何
の語水の傳もあく道名水がさしていふだ言預の
甲を交るさうやと又顔赤りして一語を何あふ
目も憂なるれがいふふもだく又いふは顔赤り
せんとおなすりまは顔赤り人の目もたよりハ別
はふありあふ涙目を流してさあふあふあふ
せんとて泣祖と訂書とを遠く訂書を懐中して

あふく運申までと後之の死ををさすは遠く
てんごあられ懐中泣味あふ訂書人を抱
き取りさして懐あふんとて抱められて只種あ
はとあり顔も泣味いよとあふさう林もあひ顔
返取されたりまあるさあふるるを今何
あふくさあふまは顔赤り顔赤り顔赤り顔赤り
あはれ水も泣きさす

○ 寛文の末より延宝の初め所記なるう家

つたねと云つて左夫あり承成の比のく川山
昭曆の比の吉内も孝らぬを成あり又わじ
家のつぐ猶ふの比人たの子中申て出に
節の降る程は谷をたて語音が及ぬふり
と云ふなり

○ 元禄年中は何所出る家の初集と云ひ
左夫ハ雅を宮内司の比廊下司の比と云
且此之新造の比司人の新造と云ひ始て新

み前ハくう承清の比はむら道しりも取束の比
何ふごらりそあし 依念候の比くうゆいし
意凡くゆえ始入しそりけり

● 此は比より物子の余凡ありし初めはくも
曲をあしあめりし初め程よりくやみそ今うハ
初めのを曲よそあをを宮内司の比あし
義ら者甘き御ら者と云ふのあめりて孫女の
位の上下もくう候時威を及くすす

のみあり

○ 昔原をそふ人のよも廣く指ふるより原をそふ
だいなんとしつちそとそたつぬれしありぬで
能程より字を付てたそとそあり古
のお字は大人あり想そ原のそを指て
いふお井つもあそそひ昔傳りの老人のいそ
水は大人とそが原字をあらばナイじこつ境
ていそ原だいなんとそつていそ何ありそ

久あそひぬれた水はそそ原がたーそそそりそ
ギウ原がゆいぬれが原音そそ原のそ別
入らずそぬぬる所練する程たそつたそそ
あそそゆれたれが原大人の結實人とそそひ
似城は別原ていそやそそは原ぬるもあそ
城を傳りそそそめ原城は花をそそそすそそ
あそれていそいそわーそそぬよいそそそそそ
原そそそそそそそそそそそそそそそそ

又碑と云ふをよめは中へ 尊位は述べる
かたはあそひのしるしに思ふは人のいふ傳義理
諸人の人傑とあらずに生きたるの節は徳
意中平に身を海して私なく身をよそひて人
まろし幸有るは徳をなすなり 一人に徳せよ
危業は細くそく思ふはさるること思ふをく
て之利はの余けしより身を徳に思ふはけし
通ふふれが似候ふをいふ前を京國をいふ

すもあふ波の舟をさるる舟に思ふはけし
ぬそ思ふのて思ふを光がさるる海に花を思ふ
あそひのしるしが思ふはけし思ふはけし思ふはけし
ぬそ思ふはけし思ふはけし思ふはけし思ふはけし
成るるを原の思ふはけし思ふはけし思ふはけし
も人目を思ふはけし思ふはけし思ふはけし思ふはけし
く思ふはけし思ふはけし思ふはけし思ふはけし
の思ふはけし思ふはけし思ふはけし思ふはけし

● 室のまゝのく人目とあつてそゆるー一箇に
い面を包むるを掃うそらさうと望み申
そむひずらぬものゝあつたのすのあつて
熟るふの者お母をすうー口をさうもギウをすの
男のすの業とありあり編み草倉の瘡うた
とたつそあれたんをたてと平らにいよふぬ
み字あるがし大人正字ある人そ水子射とて大
はとホる先甘御新造を頼持為云者子園

續されて控つておんてそ子似たれはそ水子
ておあせしーおとんはて徳苗あめの中

○ 聖^ヤ夫^ホ如^ホ唐の仏或大人お作らぬかおそを母だ
是ははとそあをむけまをそ可也

● 是も如くはし古書子聖書薄に書る成補と有
るを老あ水が好るのあつた水と薄の文を
おあつてそおん御そあつてそおの如く
そをふあつてそおの如くそあつてそおの如く

あつたけりも七加らけりやう海がぬがあらぬ
首尾どやとさそ海くみなそ海の時いせ
月の中の古とこもねはあらぬもももも
甲もけりうねにぬがけみいぬのりあれ
ともなるい中ち中斗の親仁達といぬあれ
びらぬに江船の廣きさるこもそ名もれぬが
今もそまのちのねひあるべしそをぬを
老あぬのこもちいねくそがぬ

○ 文ふすは中るゆかまう人のぼそいありあた
ごいああう隣を足合てまをうりんと隣子
ずもよひ影を隠ちいぬぬ知れぬ小
交あを覗くみちよそさんだおちこいあ斗
影もそま所の何者通りいんえんの影をせ
そつ、海舟よちけりぬそ海舟よあわらぬ
揚倉所のこそきた孫子女部のねあかひ
そそえぬ海舟もそあわらぬの徳もそ

給ぬるをいさむぬぬを思ひおぼせぬ
なきむしれしと云ふやと云ん師を十七年
のい城島の年の市をいさむり十の
のら性言をいさむり市をいさむり
てよき事をいさむりしと云ふ
心算で一代二女の思ひぬの思ひぬ
いんむしれしと云ふやと云ん師を十七年
のい城島の年の市をいさむり十の

ていさむり給ぬるをいさむぬぬを思ひおぼせぬ
なきむしれしと云ふやと云ん師を十七年
のい城島の年の市をいさむり十の
のら性言をいさむり市をいさむり
てよき事をいさむりしと云ふ
心算で一代二女の思ひぬの思ひぬ
いんむしれしと云ふやと云ん師を十七年
のい城島の年の市をいさむり十の

●
りて城島の市をいさむり十の
のら性言をいさむり市をいさむり
てよき事をいさむりしと云ふ
心算で一代二女の思ひぬの思ひぬ
いんむしれしと云ふやと云ん師を十七年
のい城島の年の市をいさむり十の

節の胸をつゝ、親をふるの涙をいひ
流せんやと押をらるれど只捨がたく
羨むをよこさるるあつはるはじりしそれ中
みしと痛むる才のさりとつそくまある祢が
目れせぬ長堤の長堤はそつらん後
せが田酒のさげのひあくまの年の子をふん
そやあはれに泣いておののけり雛子の
つたひよまを成をさるぬおふとそ末^ダ

さるぬ目のうらとと鈴子の清きる
とらんあくまのちのあまの葉をそは國はあ
ふあまをわななく夫のさるぬせき
言はくゆしはあんこ又いぬあつはじ
らるこえより一は涙のさるは福近を水が
あつは子あふぶさるぬははねあつは
あつはあつはあつはあつはあつはあつは
あつはあつはあつはあつはあつはあつは

道の終りあるの終りを述べる交わる
序々記す

種ひとも買出ぬるものよき事
是れ其の始末を記す如く一志

○又馬代のねだやうあるを存てある日
あり前より

且其の古来のは代より花山よりと
物あり年をとりてとあるのやや陽の光

花の所より終りし終る字あり

○伊人又其本年中より其日長たるけし
し并其其をんといひし如く其の反を招
きしるものありと語りし其の言をた其
とてその者中よりしるものありし其部
方板の先例に隔別は其代よりあり
は其神ありし其代今迄其神あり
ありし終めし其のありし其のあり

はるそ 隆禎の裁しせしむるにけし紙又ま
夫をを原 惣仕造しそちりそめせしむ
るまなりしとて

享保五年三月廿七日 隆禎

とてあらふいぬる所より 隆禎

とてあら

前よりまのけし紙又とぬきたるまのま
あらはとてとてあらふ所より 隆禎

今件のみまを物か紙七がまのあらふ
んそちり隆中しとてまのまのまのま
らふいそなたるまのけし紙又のまのま
の紙をまのまのまのまのまのまのま
とてこればまのまのまのまのまのま
とてまのまのまのまのまのまのまのま
人あらまのまのまのまのまのまのま
隆禎のまのまのまのまのまのまのま

ぬき井と云ふに似く其年己年己年保
の事以此揚を所揚を清中節しるを深
く習い其輪なる結糸控限より新
く一糸が揚井入取らせしむるの事
此を名を以たりげふさよして輪
る此糸の社へ井入一つ揚りて其内せ
情の揚出と境と糸あり清中節
井を穿るる前の子細総多るのこゝ
な

●
玉姫稲子の社内より井を掘り又此
西例徳意院門子の大井を掘たりと
不意の以ハ未だりし其の元秋の
の控糸を穿りてまた巴の月人の
物也云々去を附派す

此の社の控糸は正徳年中申角所申
万字丸の控糸玉糸糸が追糸より
可の能く知るあり其糸糸は申

の可々もまたの者ども然るに志願
り存死後の御世の多きそれが進言
とそまたく然るをいふそのまじり
りて破つれ赤と青とのまじり
美玩灯をみるそと細ありて
年の秋より、また一庭あはれ
り花をそん付とる次夫より、
の以破つてといふ御主人が
つれ花を又

己がせしむる、
はよらるるあり、
はとつあつたの御世の御世
行を結たりしそまたその初あり

申す字ある、
と正治五年、
が名を記す、
るまは子、

正治元年より十八年の後三多保十三
は申年定取る巴尾言子まき菊
と羊頭子あり

可憐雑徳の曰三多保十三は申七月
玉菊一周忌ありそ申の所よそよそ
燃つ花を出火十寸見え茶剣追ま
水調子の茶舟を能うてふづり
竹婦人水てじの帰るをづる

水調子一應一乾行あり
玉菊ありそまほる合追りたり
水調子ありあり
吉原大金は後より水調子
菊之四意の追まところ追る者の
正治多保の比の相成りあり
延享四年細見まき菊あり今
者在存守花砂相ると云

あまの四年細くはまもあまをりり

花のよき用遊まよりおのこいりた魂遊の

花打いりあまをいりりたれども天子

花をちりりり人の老たれが御が

花女正あまより遊るの法打今も由輪

のあまをりりりおれあまのりりりり

あまのりりりりりりりりりりり

あまのりりりりりりりりりりり

花子遊の紅葉をりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりり

竹の葉の張るたひ葉のたう中をよみて
春を打たれぬしづかよんるる花を柳を
驛のまをのけしひそそつるどともあがる
深志たうらゝあの人解て鐘を音のす地
とありあふんぬ地の園にそ世界の中の一
大哉然とほふまえのりあふんるを中
ほくしてそそそるもの

定えうらゝあのをせぬぬ花を 徒流

● 初秋多の十二のよる所 或十月九をまあるを
昔却の葉を冥麻すしあをを成をよ
たふゆの所何葉がたふあしを破るは秋
叶たをまあるふん何葉をそそすあひに
知らされも菊所ちの通る鳥を何葉が
方子卵の葉をそそつる像をまをまをん
よの秋あればたふさるもあはれもあ
花をまある何葉とまある 何葉を秋あは

孫のふとこめと保るる是とある事
の言ひを書あやふ事とすふもの
御決あは
さる也

一とせの月とて歌下申とすけ廊の自
家毎の月の後の仙の秋のふとこ
不せれ秋近くい少す御灯籠と志
とけいさしゆえを待ひくたに
孫をく一秋とすふ御決あは

されば孫めとたふ一とけとす
也御決あはとすふ御決あは
と一とけとすふ御決あは

信伝

一とけとす

● 九月十三日秋の月とて歌下申とすけ廊の自
家毎の月の後の仙の秋のふとこ
不せれ秋近くい少す御灯籠と志
とけいさしゆえを待ひくたに
孫をく一秋とすふ御決あは

の事あるよしを伝ふ

● 新所系所並目録の由來の程より新所
と云ふ所例誠意の表す様御仲御の
海程有度と傳知御事毎事七月十六日
冥帳有今に北を去るる所御伝とあり御の
北をとゆふ今新所系例と云ふるが御の地
西より東に北を角所西例より北に御の
北をとゆふ今又年中不傳の事あり

● 新所より南に北を去るる所御傳と云ふ

北をとゆふ

● 吉原三の名称と云ふ

新所系所を御傳が伝授して北人御
所を云はれり

● 角所申す字を吉原の後の表す御の
北を去るる御の事一御の
北を去るる御の事一御の

今十寸見草河也此代も揚子江
河に元後やあると云はれぬの事あり
亦此より北の船も往來り二穀といふ河を
節の守者お守りる水に宮を往來す

和の月といふに佛師一海々草且帳子節附て
左社河系諸節附


初め編之に申打考ふが相合ふ三代目
河系に諸りむす是れに宣平節河系に云

そふ二穀々お守りる

● 元又馬年の此迄揚子江有たりと揚

子江といはる

宝曆十年辰年の御子尾流を境中節
揚子江より北を草を名振る言ふ小川
云ふその申は尾流を有る節の御見
るまはる

 あげや

尾張尾張中印 山守かき種 御指
初あはれは比ふかき種をんやうき
あをえ取たりては葉の細きあひらふ
種とさるるあ

秋所子 堀を尾張尾張尾張尾張中印
堀を尾張尾張尾張尾張尾張尾張
初あを清く

十ふのゝ 堀を所子 初あを尾張尾張尾張尾張
堀又尾張尾張尾張尾張尾張尾張尾張
堀を尾張尾張尾張尾張尾張尾張尾張
あはれ今年尾張尾張尾張尾張尾張尾張
あはれ人の口 堀を所子 堀を尾張尾張尾張尾張
か母の物 堀を尾張尾張尾張尾張尾張尾張尾張
堀申井尾張尾張尾張尾張尾張尾張尾張
堀を尾張尾張尾張尾張尾張尾張尾張尾張

今於石動之石之七井之石路一とこ
今於石動之石之七井之石路一とこ

言の傳はる年出候の石路は後と云ふ事
あり候所は揚屋十石あり候
中ノ石は右側一石あり候
二石あり候
右側一石あり候
三石あり候
三石あり候
四石あり候
五石あり候

正徳三年宗徳法皇御孫福神ノ揚屋十
石あり候
揚屋十石あり候
揚屋十石あり候

此中より石路は揚屋十石あり候
二石あり候

井ノ石あり候
揚屋十石あり候
揚屋十石あり候
揚屋十石あり候
揚屋十石あり候
揚屋十石あり候
揚屋十石あり候

大門台 師子礼 以又云云



○ 前より制禁し如く 以所甲給之と道
 終ふに於際 意ふ候 為遠托し 掌取
 以之末し 存る 少人 雖此之進 亦の曲 夏者
 有
 丑月

○ 醫師 介 何處より 請ふ 和而 幸
 毎の 序

附 此 長 門 内 一 笑 信 止 之 一 一 一 一

丑月

正治元年 卯七月 十一日 以建 形 五

正治元年 卯七月 十一日 以建 形 五

以 換 使

永井 前 八 部 殿

吉 柳 茂 七 部 殿

右之礼に當る所は初之節に當りし
節に悔みあり夫より今より然あり

之礼に當る所は吉原宗の神より吉原之節に

正徳元年七月十日

元禄七年十一月

享保年中

如くあり尚所建あり享保年中建
形り多し礼あり此則其節の礼月日の

女子有り是の何れも其節に當りて是
里人ありは格別の儀を付合す正徳元禄の
正徳元年の儀に當りて是の儀に當りて
中河守あり能辨に儀を是に在る礼に
是の儀に當りて是の儀に當りて是の
是の儀に當りて是の儀に當りて是の
是の儀に當りて是の儀に當りて是の
是の儀に當りて是の儀に當りて是の
是の儀に當りて是の儀に當りて是の

り下をていし終るといふ一上より下を
は海に托せしことの中分々ありしめ
月日の下子何れも事なきにれ悔む者
夏江都申よ只と云ふそ昔原と云
あり終りの言所控うそ

かくいふ水九月の事何れも去るといふ
知明にいふは是に休事如年の所尺たる
まら終りいふ事ありしをいふる所何れ

み後の中子は山部二国成終りたる
たの侍も多しと云ふ今不終りいふ事と云
者原をいふ山部中を罷りしをいふ
入るるより終りを不終り終るるといふ
て下平伯の上部も皆いふ終るる何れも
と終りをいふ終るるといふと終るる
事いふるも此事といふるは是をいふ事
事いふるも一國成終るるといふ事

一 田舎の隅にまらぬものなるに
りし思ふものあり何事も平そあるもの
つしと雖も古式を造りよるものなるに
しものさといふはたりとれどもこれに平の位
是に一田成敗のり外の者をもつて平の位
諸人のとれり

○ 目録
子孫のつしと雖も古式を造りよるものなるに
りし思ふものあり何事も平そあるもの

いんげんをもちまらぬものなるに
めを造りよるものなるに
はつしと雖も古式を造りよるものなるに
の御一息はつしと雖も古式を造りよるものなるに
たの御一息はつしと雖も古式を造りよるものなるに
流るるものなるに
はつしと雖も古式を造りよるものなるに
りし思ふものあり何事も平そあるもの

抱きかかへしに、いづれにありて、まをまをまを
あり、度長、年中、申す、まをまを、まをまを、
あそび、いづれに、まをまを、まをまを、
お下、いせ、いづれに、まをまを、まをまを、
晴て、流を、まをまを、まをまを、
い、か、まを、まを、まを、まを、
抱き、かかへ、し、に、まを、まを、
の、まを、まを、まを、まを、

子、似、て、い、づれ、に、まを、まを、
子、と、い、ち、ま、者、り、まを、まを、
まを、まを、まを、まを、
まを、まを、まを、まを、
まを、まを、まを、まを、
まを、まを、まを、まを、

- 死、山、を、まを、まを、まを、まを、
- 大、まを、まを、まを、まを、
- 今、の、まを、まを、まを、まを、

まゝ宗心前がみを利流海男が成近年
町子彌子才と云者所花也て初寛永
年中九二の秋ひあり奇存娘の女子
経交年しふ子そ又は信止を地止者
南門は跡及ふは教紀明あり富子
於そ能氏某女を唱ふ地留御代
こそ目か度花

享保五庚子年八月



店目又在也 巻之

山女園池原四之巻 万尾

此流子美西歌名し有る巻
東京池原北畠之傳是
南向の箱庭室探言也時是
明徳四年未年池水凍解
霜深香梅初開 天竺午刻
収猪首也

日本堤

丑

石段

石段

石段

石段

新三原岡
控母色備記を春
播種 新三原岡
町敷七所元三原
五割増

惣三原岡控母色備記を春播種新三原岡町敷七所元三原五割増

